

平成10年 7月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

桶職の太子講

3月24日付で野村委員さんの後を受け、指導員をさせて頂くことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

平成5年から市内の郷土工芸・技術調査団の一員に加えていただき、十数軒の職人さんの仕事を見させていただくことができました。

そのひとつ、小曾木の山崎桶屋さんの仕事場の前に、聖徳太子を祀った太子堂がありました。1メートル以上ある樽の側面をくりぬいて、石造が納められています。樽はご主人が造り、像は30年ほど前、東京青山の「石勝」という石屋の弟子が、造ったものだそうです。

聖徳太子は、江戸時代、大工、左官、鍛冶屋、桶屋などで尊崇され、同職仲間が集まって講がつくられていました。青梅地区の太子講の始まりは、明治になってからで、沢井地区では明治21年、調布村、日陰和田村などでは明治28年からだそうです。(大沢昭彦著「桶職をめぐる民族」)。そのやり方は、近隣の村の桶屋が集まって太子の掛軸を飾り、ろうそくを立て、鏡餅、酒、肴を供え、技術の向上を祈り、昼食を取るというものでした。午前9時頃から始まり、午後3時から4時には、おひらきになりました。開催日は、太子の忌日である2月22日頃行われることが多いが、山崎氏の場合は、年1回、秋口に行われたそうです。10人ほどの仲間が集まり、食事をしながら(酒はあまり飲まなかった)、情報交換、桶・樽の値段の統一などが話し合われました。宿は、持ちまわりで、帰りに鏡餅を切り分け、供物としてもらって帰りました。

桶の創成期は、鎌倉後期から室町期といわれていますが、盛んになったのは、江戸初期からのようです。青梅地区の桶屋の記録は、寛保3年(1754)の沢井上分の村明細長に、農業と兼業の桶屋2名が見えます。文永4年(1821)ごろから、専業となったと思われ、諸職人の中に桶屋5名の名が記されています(市史史料集第27号)。

桶・樽は、醸造業には不可欠なものでした。大物師^{おおもものし}とよばれる酒樽など大きなものを造る職人と、小物師^{こものし}と呼ばれる風呂桶以下のものをつくる職人がありますが、どのような経過でわかれていったものかは、はっきりしません。

江戸後期、明治・大正期に盛んだった桶屋は、昭和の初めごろからしだいに減少していきます。昭和30年代に入って酒屋などの醸造が、タンクに切りかえられて、大物師は大打撃を受け、小物師もホーロー、ステンレス、プラスチックなどに押されて、激減してしまいました。

それに伴い、太子講も昭和41年を最後に、全く行われなくなりました。山崎氏が、太子堂を造られたのは、その頃です。太子像は、今も現役で桶造りに精を出しておられる氏を、見守っています。

参考資料 「桶職人をめぐる民族」 武蔵 大、大沢昭彦
「青梅市史史料集第27号 村明細書」

(文責 小川)